

イエスは寶錢箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、寶錢箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」
-マルコ 12 章-

神により頼む ひたむきな心

夏のプールサイドには監視員の目があり、子供が飛び回っている園庭には先生目があります。そして世界には、神さまの目がすべてをとらえています。その中でこんな声を耳にします。「神さまがおられるのなら、なぜ世界の悪を見逃しておられるのか？」と。

世界を嘗め尽くした歴代のウイルス禍、絶えることのない戦争、民族の大虐殺、これらの惨禍にかつて歴史は「神は死んだ」とつぶやいて、神無き世界を人間中心主義に置き換えて、信仰の火が消えかかった世界に今、生きている私たちは創造主である神を、被造物である私たちの「おもり役」と見てはいないでしょうか？

世界の管理を任された人類の不始末は、人類がその責任を負うべきなのです。

かつて、幼稚園の園庭勢いよく転んだ時、ず、後方で立ち話をあげたのです。



で元気に飛び回っていた男児が、その子は起き上がろうとはせしている母親を後目に、うめき声「起きるゾーっ」

世界の悪の「尻拭い役」を神に差し向けるのは、ちょうどこの園児のようです。神が人類に心を留められるのは「神により頼む ひたむきな心」です。聖書はそれを旧約の「サレプタのやもめ」と新約の「貧しいやもめ」に見ています。

命の最後の一滴を使い果たして、今、死を待つばかりの二人のやもめの一人、サレプタのやもめに、エリアは酷な注文をしています。「まず、それで私のために小さいパン菓子を作って私に持ってきなさい。その後であなたとあなたの息子のために作りなさい」と。このやもめが「神により頼む ひたむきな心」の持ち主である証しは “行ってエリアの言葉通りにした”ことでした。

一方、新約に見る、貧しいやもめにとってそれは、“自分の持っているものすべて、生活費を全部入れた”ことでした。

この二人のやもめの行為は、“死をも受け入れ、自分の命のために思い煩わないで捧げた「神により頼む ひたむきな心」でした。その心は、殉教者と等しく、神の心を最も打つ、信仰者にとって、神への最高のプレゼントでした。